

(附記) 文樂と對立した各座の興亡

夏草やつはものどもの夢の跡

遠くは博勞町稻荷境内に於ける文樂軒の興行、松島から御靈境内に於ける文樂座の興行、現在四つ橋文樂座の興行、人形淨瑠璃と云へば、直ちに、文樂、といふ代名詞を以て呼ばれるほど、文樂座の諸興行は終始一貫して系統立つてゐるが、こゝに又一方文樂座に對する別派の興行が存在してゐたことを無視してはなるまい。往昔の竹本座に對する豊竹座は云ふまでもないが、近くは大正三年の近松座潰滅までは、絶えず對抗した敵軍の陣營があつたのである。今その主なるもの、動靜を書き添へて、斯道の爲に刺激を與へ反省を加へたその功績を記録して置く。

(一) 三世長門太夫等の竹田芝居旗揚げ

天保九年、文樂軒の芝居から、一座の花形三世長門太夫が脱退することになつた。その表面

的な理由は、斯道を盛んならしめるには二座對抗して、鑄を削るところに、技藝の練磨があり發達がある、それは遠く道頓堀に於ける竹豊時代がそれを語つてゐる、今日の衰境を救ふには此外に道がない、後進の誘導も、何も彼も、すべては競争の上から生れる。よろしく別派を立て、對立するといふのである。さうして、一面その裏を察すると、當時美音家三代重太夫（後に五代目政太夫）が、殆んど座長格で牛耳を執つてゐた、その專横に嫌りなかつたのと、尙頭取などいふ人物に可なり己れ等の領域を犯される不快さもあつたことは疑ふ可くも無く。要するところ不平と不滿に鬱勃たるものがあつた結果で、藝術的な内部的にも又外部的にも、長門始め脱退組は最早や文樂には堪へられなくなつたのである。それは重太夫と長門の年齢の上からも見出される見解である。即ち前者の五十九歳に比して、長門は生氣潑瀾たる三十九歳の若盛りである。長門をして退座の決心を爲さしめた直接動機は、興行師綿屋熊次郎の熱心なる勸説が與つて力あるものであつた。

日ならずして、同志は反旗を翻へして起つことになつた。豊竹靱太夫、竹本大隅太夫、同咲太夫、同越太夫、人形では桐竹門造、吉田金四、豊竹東十郎、など屈指の名手を蒐めてゐる、實に天保九年十二月のことだつた。それ等同盟の士の痛烈なる旗揚げ興行は、いよいよ翌天保

十年一月、竹田の芝居に於て花々しく開演された。妹背山『芝六内』『籐七上使』咲太夫、『雀』大隅太夫、娘景清『花菱屋』越太夫、『日向嶋』長門太夫、『阿波鳴戸』靱太夫、ことに妹背山山の場の掛合ひが古今無類といふ評判を取つた。その役割は大判事が長門、定高が靱、久我之助が咲、雛鳥が大隅である。さうして、この對抗興行はひき續いて數回打つことが出来たが、どうしたことか永くは續かず、その年内に終末を告げてゐる。

その翌十一年六月には、文樂の重鎮重太夫こと五代目政太夫が病歿したので、自然、長門太夫等は復歸することになつて、事實上槽下の格に座つて、さらに新たな活躍を續けることになり、脱退組のすべても次第に歸座してゐる。

長門太夫一味脱退の際、長門と外四名の太夫との間に取り交はされた『爲取替申約定一札』は、よく此間の消息を物語つてゐるものがあると思ふから、左に抄出して置く。

爲取替申約定一札之事

一元來竹本の兩祖より於道頓堀に常操り淨瑠璃芝居興行仕來り候處近年諸事猥に相成候に付相續不致中役に及び適々再興の志有之輩打寄り組建ると云へ共人氣不和銘々威勢を争ひ貪高給其上頭取杯と號け一座給金の増し上端己の利慾に致仍て元方自ら不勘定に相成長久不致漸一ヶ所

の稽古場にて人形を差加へ常操り興行相成候に付當時の威勢に任せ行ひ我意を太夫三味線並に操り方杯を芥の如く見下し己に詭らはざる者は追下け適々藝道修業志之者有之と雖も依怙の行ひ多く夫れ故修業之者も辛抱難成斯くては可然銘人の藝人等も出来不致然る時は兩元祖始め先祖師達の弘め置れし淨瑠璃も次第に衰微と相成事歎數乍然未だ時不來是迄打過候所此度去る方より招きに隨ひ道頓堀にて常操り淨瑠璃再興に及び候然上は同志の者共諸事善惡共互ひに助け合如水魚交り隨分藝道を勵み候はゞ自ら長久致銘々の門業は申に不及他門の末に至迄一ヶ所にも稽古場相増候時は藝道修業の便りに相成先祖師達へ對し候ても報恩の端にも相成らんと存候然る上は右同志の者共之中此以後脇より如何様の事申參り候共一己の缺引決て致間敷一統の結合にて一座の末に至る迄潤に相成共銘々談合の上多分の意に任せ可申候然ば先年より我々仲間にて因講連伊勢講有之然を此度相改め同志の輩眞の因講と準之伊勢講を組建年毎に一度づゝ信心の輩講中爲家内安全之伊勢兩宮へ參宮可仕候則ち此度の大志も 天照皇太神宮を正面に祭り神前に於て約定仕候事故若し相背き一己の仕方杯有之時は神罰を蒙り且又各々方此以後同居同席被下間敷候共一言の中分無之候爲後日約定爲取替一札仍て如件

天保九戊九月廿一日大吉日

尙各々方御承知の上仍て御願前文は長門太夫認め申候無然銘々の名前は則ち自筆にて認爲取替申候

	豊	竹	豊	竹	豊
	竹	本	大	隅	太
	本	本	大	隅	太
	本	本	大	隅	太
	本	本	大	隅	太
	本	本	大	隅	太
	本	本	大	隅	太
	本	本	大	隅	太
	本	本	大	隅	太
	本	本	大	隅	太

(二) 春太夫團平の脱退と別座組織

長門の脱退と共に文樂座に大きな衝動を與へた第二の脱退がある。それは明治七年の春太夫と團平の脱退がそれである。この時の脱退理由には藝術的に此兩人に惱みがあつたわけではなく、仕打文樂座との間の給金問題に他ならない。但し春太夫とても自分一己の問題ではなく多くの子弟に關するだけに、遂に衝突脱退といふところまで急轉したわけである。そこで兩人はその門下を率ゐて竹内といふ金力の後援者を新たに頼んで、先づ大江橋北詰の寄席を手始めに

堀江などでも數回の文樂對抗興行を行つた。ところが之れは幸ひにも非常な好成績で市中の人氣を蒐めることが出來たのだつた。それに反して、主なる太夫と三味線に出て行かれた文樂は殆んど散々の體で忽ち興行も爲し得ざるほどの大打撃を蒙つたのである。そこで、何とかこの頽勢を挽回しなければならぬ急場に迫つて來た。文樂では早速の案として、前年の末から九州巡業に出てゐた越路太夫（後の攝津大掾）を呼び戻して其師匠の春太夫と對抗せしめる策を採つた。此時分の越路太夫は花形の賣出し當時だつたので文樂には可なり多額の借金もあつたのだから、恩師に弓を引くの誹あることは承知をしてゐたが、文樂座からの交渉もまんざら撥ねつけてしまふわけにも行かず、苦境に立つたのであるが、而し意を決して、遂に文樂座へ出勤することになつた。住太夫、梶太夫、組太夫、實太夫、重太夫、彌太夫等がその時の座組である。明治八年一月十八日が初日菅原の通し、越路はその四段目寺子屋であつた。此興行が四十四日間續いてゐるところを見ると、越路太夫は既に錚々たる人氣者である。ところが越路自身が既に豫知してゐたやうに、世間では師匠に反抗する不屈者とし、越路に對して可なり批難の聲が盛んだつた。温厚玉の如き人格者としての越路の生涯中おそらくこんなことは他にはない、けれども後には團平が仲裁して此事については師弟間の感情問題を惹起するやうなことも

なく、無事に済んでゐる。さうして、春太夫は間もなく明治十年に文樂座との和解が出来て、その三月興行に遽かに出勤することになった。『八陣守護城』と『加賀見山舊錦繪』が極つてあつたが、春太夫の爲めに特に『阿波鳴戸』を加へることにした。だが途中に病を發して休業したが、之れが文樂座での最後となつてゐる。而かも老年の春太夫は遂に其年七月二十五日行年七十歳をもつて死んだ。

(三) 柳適太夫等の彦六座勃興

文樂對立派に明治十七年の春、博勞町稻荷社内北門の彦六座がある。この座建設の首唱者は、その前々年の十五年頃、日本橋北詰の澤の席（俗に小文樂）で興行をしてゐた二代目豊竹柳適太夫等の同志の一派で、是等が文樂と對立的に進出して來たのである。柳適は其頃素人で灘安と呼ばれてゐたが、その連中の座摩の前の沼田屋の主人を始め數人で、素人淨瑠璃結社の『彦六社』といふのを設けてゐたから座名を『彦六座』と付けたといふ説と、灘安が得意の彦山權現の六つ日から取つたのだとも云はれる。併しいづれにしても、灘安が重なる資本主であつたのだから同人が座元となつてゐる。こんな風に素人の旦那衆としての座元と太夫連の興行だから、

なんとなく派手々々しい、而かも太夫の初代柳適と灘安は共に灘の酒問屋の旦那だつたといふのだから、よく伴れ立つて豪遊をしたと傳へられてゐる。さて此一座の最初の興行はその年一月、重太夫、初代柳適、組太夫、春子（後の大隅太夫）、三味線には、廣助、新左衛門、勝七、廣作、人形には吉田才治、豊松東十郎、吉田小辰造が重なる連名である。狂言が『菅原』柳適が道明寺、組が佐太村、重が寺子屋、ところが第一回成績としては失敗であつた。そこで二月にすぐ二回目を開け『先代御殿』を春子、『橋供養』を柳適、『三代記』を重、『吃又』を組、といふ獻立であつたが、今度は柳適の衣川庵室の評判がよくて大人つゞきてあつた。多分灘安と柳適の豪遊ぶりが宣傳の効果を挙げたのであらう。その後引續く此座の好成績は直ちに當時松嶋で興行をしてゐた文樂座へ影響して來て、此座は不況になる、そこで文樂は御靈社内への移轉の機運を速められた結果となつてゐる。

斯くて彦六座は優に文樂の一敵國として、儼然たる存在を示してゐるうち、文樂から、美音の盲人で聞えた住太夫が轉じてくる、豊澤團平も加入する、で益々大を爲さんとして數年を経るうち、今度は逆轉して住太夫の死、劇場の焼失、柳適の死等引續いての不祥事が起つて、劇場は再築したが、とても往時の盛觀は見られなく、漸衰の徵を現はし、遂に二十六年九月の興

行には、登場の大夫が足らぬやら、銀主の十八大夫が姿を隠すといふやうな不體裁な有様で、僅か七日間の興行で休場となり、哀れやこれを最後として、十年の全盛を誇つた彦六座も遂に没落してしまつた。彦六座十年の興行中、さすが金持の道樂興行らしい、好い慣例を遺してゐた一つ二つの事を記して置く。從來淨瑠璃、歌舞伎の別無く、劇場といふものは、すべて土間の上に薄縁りを敷き、その上に座蒲團を敷いて座ることになつてあつたのだが、この彦六座が創設して、現今のやうに床を張ることになり疊や毛布を敷くことを始めた、従つて下駄の如きも従來は場席へ持つて入つて下駄と一緒に見物してゐたものが、これも彦六座は木戸口で預かることにした。夏の興行には見物に團扇を配るなども氣が利いてゐて新らしかつた。かういふ慣例がやがては道頓堀をはじめ他の劇場へ及ぼしてゐる。

(四) 五代彌太夫等の稻荷座出現

—明樂座、堀江座から近松座へ—

明治二十六年九月に滅んだ彦六座は、その翌二十七年三月、博勞町の料理屋花里藤兵衛に依つて買収され、稻荷座の名によつて更生した。盟主として押されて起つたのが、五代目彌太夫

である。先年文樂座引退休養中であつたのが、先師長門太夫の衣鉢を襲いで、斯道獎勵、二座對立主義の主張のもとに櫓下として座つたのである。一座には、春子改め大隅、越（後に住）、新靱、春子、伊達（後の土佐）、長子（後に六代彌太夫）、七五三、生嶋などの太夫が有り、團平以下の三味線があつた。初開場の狂言が『菅原』道明寺を新靱、佐太村を越、寺子屋を大隅が語り、彌太夫は『歌祭文』の油店、めし碗を語つた。こんな風に對立派の稻荷座の更生は立派に生長を遂げてゐたが、時恰も二十七八年の日清戦役に會して、座主の花里が財力的に失敗をして手を引いてしまつたので、ちよつと一頓挫を起したが、一座連中の嘆願によつて、彌、大隅、團平の三人は暫らく無報酬で勤めて其維持に努めたのであつた。ところが、此處に有志者數名が集まつて來て、これを株式會社と爲し、經營難を救ふことになつた。大阪文藝株式會社が其名稱（二十九年十一月創立）、さうして三十一年六月まで順調に進んでゐたが、社長をしてゐた岡崎榮次郎といふのが、文樂座側の策に乗せられて獨斷潜行的に此座を敵方に賣つて、滅亡を早めてしまつた。かうしたどさくさ最中に團平が死歿した、この慘澹たる否運を目撃した彌太夫は、座視するに忍びず、自ら有志の舊株主を説いて、更に北堀江上通二丁目（遊廓内）の明樂座を道場とし、同年十一月稻荷座一派の再起を企てた。一座へは大隅、住、組、春子、

新靱、此、長子、生嶋、廣作、龍助、源吉、小團二、友松、新左衛門。人形には清十郎、門造、玉米、袋助、兵三、等を蒐めたが自分は後見として床へは現はれなかつた。狂言は『伊賀越』政右衛門邸が組、沼津を住、岡崎を大隅、『白石噺』揚屋が春子、かうして四ヶ年餘を繼續したが、三十六年一月を以て、また瓦解の止むなきに至つた。越えて二年餘三十八年九月には、明樂座の殘黨である若手の錚々たる連中はかりで團結して北堀江市之側堀江座に立籠つて、背水の陣を布き、大奮闘を始めた。これより先に一座の棟梁格である大隅太夫は文樂へ奔つて攝津大塚の傘下に入つたから、一座は春子、伊達、長子、雛、此、新靱。三味線、龍助、仙左衛門、小團二、新左衛門、猿次郎。人形、兵吉、玉松、袋助、玉治、といふやうな顔觸れとなつた。狂言は『三信記』肉附面を長子、堅田を春子、『二十四孝』御殿を伊達が勤めて、衆評はなかなかによくその熱演は文樂座以上といふ聲もあつた。かうして、此一座が四十四年五月まで、六ヶ年ばかりを續けて來た時、こゝに大阪有數の紳士達が發起して近松座創設の企劃が起り、準備が成つて四十五年正月興行から、劇場を佐野屋橋南詰（今の文樂座の地）へ新築して初開場の蓋を開けることになつた。一座は先の顔觸れに文樂から歸つた大隅を加へ、狂言も近松門左衛門作『國性爺合戦』其他を上演。爾來大正三年に至つたが、その間、大隅の臺灣での

客死、伊達太夫の文樂入り、經營當の失態續出によつて、春子、長子等踏み止つての大苦戦も遂に力及ばず、彦六座以來、斷續的ではあつたが、二座對抗競技向上を意圖した始祖義太夫や長門太夫等の主張は、兎に角通されて來たのであつたが、とうとう大正三年五月を以て斷然休座をするの止むなきに至つた。この瓦解直後、近松座代表大株主で郷土藝術の熱愛者緒方正清博士を始め島徳藏、八木與三郎氏は、何としても近松座繼續に愛着強く、著者に會見を申込まれた、そして物質上の問題は總て三人で引受けるから思ふ存分やつて見ては……との話。そこで時代對應の愚案をも加へ、文樂座とは趣きを異にした新興行案を立て、近松座更生を企てたが、ある事情（座員の非藝道的な臆病神の祟り）から中止するに至つた。爾來幾星霜、金日本の人形淨瑠璃は遂に文樂座の獨占物となり了つて、一の對立するものもなく、無競争無刺激の苟安凝滞と云ふ情態。今の文樂座の場所が曾ての近松座の本城であり、そして稻荷座一黨將兵の討死の跡と想ふと、著者自身に最も因縁が深かつただけに……夏草やつはものどもの夢のあと……の感傷めいた氣持にさへなるのである。

